

悪魔の囁き

MothShine

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カズマが悪魔の一言により悩み、苦しみ、そして乗り越えていく、
そんなお話

目次

2 話 1 話

—

—

6 1

1話

「……ママ」

「……ズマ」

「カズマ！」

「ふあ！」

俺はその声に驚きみつともない声を上げた。

「ど、どうした？ダクネス」

「どうしたも何も無いぞ。さつきから何回声をかけても反応がないから心配したぞ。」

「そ、そうか……それは済まなかった。」

「何かあったのか？」

「いや……考え事をしていただけだ……。」

「この間の男が関係しているのか？」

「そんなことは……」

ない。と言いたが言葉が続かなかった。

「あの男に何を言われたのかは分からないが困ったことがあったらなんでも言うんだぞ？」

「あ、ああ。ありがとう…。」

「めぐみんもアクアも最近カズマの様子がおかしいと心配しているぞ。」

「済まない…。何かあったら相談させてもらうよ。」

「そうか…。私はお父様の仕事の手伝いに行つて来るが何かあったらめぐみんかアクアに言うんだぞ？」

「ああ…分かった。」

「では、行つてくる」

「行つてらっしゃい」

ダクネスが出ていってから俺はこの間の男についてまた悩み始めた。

それは1週間前だった。

いつも通り屋敷でゴロゴロしていたら

「カズマ！暇ならクエストに行きましょう！」

と、めぐみんがまた馬鹿なことを言い始めた。

「なあ、アクアく、まためぐみんが頭のおかしいこと言ってるぞ。お前からも言つてやつ

てくれよ。」

「別にいいんじゃない？たまには外に出ることも大事よ。」

「どうやらアクアは金がないらしい。クエスト断固拒否派のあいつが賛成する時は決まって金がない時だけだ。」

「なら、お前らだけで行つてこいよ。」

「それじゃダメなんです！」

そう言うのとめぐみんは俺の耳に口を近づけこう言った。

「私にかっこいいところを見せてくれるのではないのですか？」

「フツ」

「ああ！今鼻で笑いましたね！」

俺は騙されない。こいつといいダクネスといい期待させるだけさせておいて結局は何も起きない。

だったら、最初から期待をしなければいいだけだ。

「俺はいつ出てくるか分からない魔王軍幹部のために力を温存しなければならない。だから俺の事はほつといてくれ。」

俺くらいになると魔王軍幹部じゃないと相手にならないからな。

「何を言っているのです。こないだなんてアクアと一緒にジャイアント・トーダーに食

べられていたでは無いですか。」

おっと、思っていたことが口に出ていたらしい。

「そーよ。そーよ。カズマさんはヘタレで口だけなんだから。」

駄女神が何か言っているが俺は気にしない。何せ俺は心が広いからな！

「そーですか、そーですか。カズマは行きたくないよ。」

「やっつと、分かってくれたかめぐみん。そういうところ好」

「それなら私にも考えがあります。」

きだぞ。と言おうとしてめぐみんに遮られた。

なんだろう、嫌な予感がする。

「カズマが大切にしているコレクションとやらがいつの間にか無くなっていてもいいんですね?」

な、なんでめぐみんが知っているんだ!?

あれはダストがダンジョンで見つけてきたと言っていた日本人が書いたとされる国宝だぞ!?

「おっと、その顔はなぜ知っているのかと言う顔ですね。リースさんからお聞きしただけですよ。」

だ、だが隠し場所までは知らないはず!

「隠し場所は知らないとしても思っているのですか？マツトレスを外すと」

「あー！あー！あー！急にクエストに行きたくなつたなあー!!」

「そうですか。では、ダクネスがクエストを選んでるのでギルドに行きましようか。」

めぐみんは勝ち誇つた顔でそう言い、アクアはニヤニヤとこちらを見ている。

いつか倍にしてやり返してやると心に誓つた俺は久々に装備を着て、

ギルドに向かった。

2話

カランコロソ

俺の大事なコレクションが人質に取られしよーがなく久々にギルドにやつて来た。

「おお〜カズマジやないか。珍しいなギルドに来るなんて。明日は雨か？」

ギルドに入るなり冒険者仲間にそう言われる。

「おいおい、俺ほど真面目に働いているやつはそうはいないぜ？」

なんせ、魔王軍幹部も倒しちまうんだからなあ！

「ねえねえ、めぐみん。カズマジさんがまたおかしいこと言ってるわよ。」

「アクア、そつとしておきましょう。頭がおかしいのは前からですよ。」

あいつら聞こえてないけども思っているのか？

これは、お仕置き（ステイール）が必要なようだな。

俺は、手をワキワキさせめぐみん達の方へ近づこうとしていた。

「やつと、来たか。まさか、カズマジが来るとはな。」

そう言いながらダクネスが近づいてきていた。

どうやら、あいつらは助かったみたいだ。

「俺だって、たまにはクエストに行くときぐらいあるさ。」

俺は、そう言いながら振り向いた。

「ほおー、めぐみんが大丈夫だと言っていたが、どんな弱みを握られているんだ？」

ドM変態クルセイダーの癖に鋭いじゃないか。

俺が何とか誤魔化そうとしていた時だった。

「カズマさんったらね、隠し物をしているみたいなの。」

アクアがニヤニヤしながらそんなことを言う。

駄女神めなんてことを言いやがる。

「その隠し物って言うのがね〜…」

くっ、神様、仏様、エリス様、誰でもいいので助けてください！

そう思った時、

「カズマはゲーム機なるものを紅魔の里から持ち帰っていたのですよ。」

「え!？」

「え!？」

思わぬ人から助けられ俺は驚いた。

「なんで、カズマまで驚いているのだ？」

「そ、それは…」

「カズマは紅魔の里から取ってきたことは知らないと思っていたから驚いてしまったんですよね？」

「あ、ああ、まさかそこまでバレているとは思わなかったから驚いたんだ。」

「ほおー、そうか。」

ダクネスは、疑わしそうにこちらを見ていたが納得はしたらしい。

「ところで、アクアはなんで驚いたのだ？」

「そ、それはね…」

ダクネスとアクアが喋っている間に俺はめぐみんに疑問に思ったことを聞いていた。

「なあ、めぐみん、さっきは助かったがなんで助けたんだ？」

「カズマの性癖や弱みは私だけが知っていたかっただけです。」

めぐみんは、ちよっとだけ頬を赤くしながらそう言った。

こ、これは好きということでもいいのか!?

いや、ましてこれまでもそうだ、期待させるだけで結局何もないので、期待はしないと誓ったはず。

気をしっかり持つんだ!

俺は、自分に素晴らしい聞かせ、

「そ、そうか。」

と、だけ言いめぐみんから離れ、ダクネスに話しかける。

「ところで、ダクネスはクエストを選んでくれてたんだよな？何にしたんだ？」

「ああ。これなんかいいと思うんだ！」

アクアとの話を辞めて目をキラキラさせて選んだクエストを教えてください。

その内容は、

《近隣に現れたローパーの調査または討伐》

と、言うものだった。

「私は、カズマ達を庇うためにローパーの攻撃を受けるのだ。そしたら、囚われてしまい、あんなことやそんなことをされてしまうのだ！」

いつも通りウチのクルセイダーは頭がおかしいらしい。

「とりあえずこれは、却下だな。」

アクアとめぐみんも頷いているのでいいだろう。

「なあ、ダクネス、他にクエストはなかったか？」

「鎧の中に触手を入れて何をする気だ！そ、そこはダメだ。ハアハア…。」

まだ、妄想をしていたらしい。

「とりあえず、この変態は置いておきクエストを決めに行こう。」

俺たちは、ダクネスを置いて掲示板へと向かう。

「放置プレイとは中々やるではないか、ハアハア…。」
あんな変態はさっておきサクツとクエスト決めますか！